



もののみかたがなる

2020年

ワークショップ + テキスト・インスタレーション (つや消しの灰色に塗装した壁に、光沢のある銀のカッティングシート)

テキストサイズ可変

TOKAS本郷(東京)でのプロジェクト『追熟と訛り:未熟の回復と鮭の遡上』の一部として

プロジェクト『追熟と訛り』では、客地で行なうワークショップや社会実験を通し、動く人々の生活の中にある言語と文化の越境の襞に隠れるものを浮き彫りにしようと試みている。

COVID禍のストックホルムでは、日常を失い新たな状況に適応しようとする社会と、母語を離れて客地の文化に感化される自己を重ね、変容するものの過去との隔たりを反芻する一連の実験『未熟の回復と鮭の遡上』に従事した。

訛りの距離感

I got some accent in the way I look at the world. 日本語に直訳すれば、「ものの見方に訛りがついた」。英語においても独特で詩的な表現であるこのひと言は、母語を離れて移民となった自己の状況と、かつて過ごした環境に置くことで築き、気付いた、隔たりと心情を喩えている。

方言のように、訛りは話者がどこからきたかを示す。海外の各地を転々とするなか、母国での暮らし方や考え方を持ち続ける努力をするかわりに、その土地の言葉だけでなく、自分が心動かされ、共感できる現地の価値観や観点も身に付けてきた。今私についているその「訛り」は、出自や現在地だけでなく、私の歩んできた道のりを映し出している。

「囚われ」から解放される行為

ストックホルムと京都を結んで行なった書家・神郡宇敬とのオンライン・ワークショップでは、このひと言を下地に、書くことや教えること、そしてパニック障害や網膜剥離といった日常を失う体験、それらのもたらした目覚め、モノやコトの現れとその捉え方について対話した。

変容する自己、過去との距離の省察やその途上で得た「囚われない」感覚を踏まえて、このひと言をどのように体現するか。左手、横書き、カタカナなど普段の「なれ(慣れ、熟れ)」から離れたかたちを採り入れ、試行した。

反発と吸収の重なり

この書家が、負とされるような過去をどのように乗り越え、受け入れたか、そしてその体験を包み隠すことなく明らかにする様子に感銘を受けた。書家とのワークショップの後、その経験について沈思し、このひと言を再び、自分自身で書くことにした。

白い半紙に白の顔料マーカーでこのひと言を日本語で書き、そして、紫の水性ペンでこのひと言を英語で上書きした。表面が白い顔料で覆われていない部分では紫のインクがにじみ、一様でない線で書かれた英語のひと言が現れた。

TOKAS本郷での展示では、この試みの書を光沢のある銀色の切り文字に変換して、別の作品(『文字の動き』)の映像投影のためつや消しの灰色に塗装した壁に設置。そのメタリックな表面に投影の光を受けて反射した時のみ、ちらちらと揺れる光を伴って、このひと言が現れる。



(左頁) テキスト全体のインスタレーション風景 (右頁、上から) 吸水性のある紙に、まずは白の顔料マーカーを用いて日本語で、その後紫の水性ペンを用いて英語で書かれたひと言; 別作品(『オ・ウ』)の仕器のあるインスタレーション風景

